

江

戸時代前期の俳諧師松尾芭蕉による『おくのほそ道』。芭蕉は旅の初日に、日光街道二番目の宿場町草加に立ち寄ったとされる。埼玉県草加市は、周辺に水田が広がる宿場町が発展した町である。

1962年12月から翌年12月にかけて、その草加におびただしい数の人が続々と集結した。彼らは日本住宅公団が建設した草加松原団地の入居者だった。団地はA地区からD地区の四つの区画に分かれ、総戸数約6000戸という日本最大の規模を誇った。完成した当時「東洋一のマンモス団地」と言われたほどだ。

団地の完成と同時に東武伊勢崎線の松原団地駅も開業。都心への通勤も便利なことから、入居者抽選の倍率は高かった。難関をくぐりぬけて入居を射止めた若い入居者の多くは、最新の設備を備えた憧れの団地暮らしを満喫した。だが、完成当初は不便なこともなかったわけではない。特に住民

つながりを深め、やがて家族ぐるみの交流が育まれた。各地区に作られた商店街を媒介に、住民のつながりはさらに深まってくる。商店街は買い物をする主婦たちの交流の場となり、商店街広場に下校後の子どもたちが集まれる祭りは、多くの露店と住民でごった返した。住民は積極的に交流を求め、交流の輪は無数に広がった。

当時、東洋一のマンモス団地と呼ばれた草加松原団地

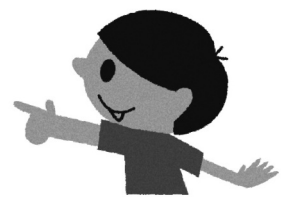


地域が高齢者を見守る街 埼玉・草加松原団地(1962年・昭和37年)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



を悩ませた出来事は、台風や梅雨時の大雨のあとにやってきた。

◆マンモス団地に生まれた絆

草加松原団地の敷地は水はけが悪く、ちよつとした大雨で膝下まで水が溜まった。当時の住人によると、大雨の日に電車の窓から団地を見ると、湖に団地が浮かんでいるようだったという。駅から最も離れたD地区に住んでいた元住人は、スーツのズボンをまくって家を出た。裸足のままC地区まで歩き、水がなくなつたところで靴下と靴を履いて駅に向かった。

その頃の様子を記録した資料には、台風や梅雨時の集中豪雨のあとは雨水があふれ、通勤や通学で駅に向かう住民がボートで運ばれたという記述もある。むろん排水設備や貯水槽などが建設され、間もなくこの不便さは解消された。

一方、草加松原団地の先進性を示すエピソードもある。入居が始まった62年当時、全国の電話普及率は人口100人当たり5件とい

う割合だった。団地にも電話はなく、6000世帯に公衆電話が3台という状態だった。

住民は自治会などを通じて電話敷設を求めた。その結果65年に約3000本の回線が一気に導入される。草加松原団地の電話普及率は、全国平均を大きく超えた。

当時を知る住民の記憶では、回線の導入と同時にほとんどの家庭に電話機が入つたという。しかしながら、隣同士の2軒で1回線が割り当てられたため、同時に電話を使うことはできなかった。そこから、電話をかけるときに声を掛け合う習慣が生まれた。

「ごめんね、ちよつと電話使いたいんだけど、いいかしら？」

電話の導入は隣家との気軽な関係を生んだ。団地の住民は、ほかにもさまざまな場面で交流を広げていく。若い世代が多かつたため団地の子どもは増え続けた。近所に学校が開校し、団地の子どもは皆同じ学校に通うようになる。親たちは学校行事やPTAを介して

つた。団地には濃密なコミュニティが出来上がっていた。

◆見守りで「つながり」再生

子どもたちが成人し団地から出て行くにつれ、住民は減少し高齢化が進む。高齢者の単身世帯や2人世帯の割合が増加し、営々と築かれてきた住民のつながりは徐々に希薄になっていった。

2005年、URはこうした背景のなか老朽化した草加松原団地の建替事業に着手する。大きな問題となっていた高齢化に対処するため、いくつかの事業方針を打ち出す。そのうちのひとつが「高齢者向け みまもり住宅」だ。

建替えられた団地の一角にあるみまもり住宅はバリアフリーが確保された。高齢者が動きやすいように間取りが改善され、車椅子での移動にも支障はない。キッチンをはじめトイレ、浴室、洗面所などの住宅設備も、車椅子を想定した配慮が行き届いている。

社会福祉法人草加福祉会と提携

した「みまもりサービス」も提供される。毎日電話による安否確認を行い、続けて3度つながらない場合は、すぐにスタッフが駆けつけ、オプション契約を結べば家事代行などのサービスもある。

住民相互の助け合いも機能し始めた。松原団地見守りネットワーク会長の布施郡二氏によると、週1回の電話による安否確認を行っている。高齢者が気軽に会話を楽しめる拠点「ふれあい喫茶」の運営、草加市から委託された広報紙の配布活動を通じて、引きこもりがちな高齢者を見守っている。

見守りネットワークでは家事援助などのサービスも提供する。支援に携わるスタッフは語る。「作業に行くと、作業をしている間中、依頼者が横に座ってずっと話しかけてくるんだよ。たぶん寂しいんだろうね」

スタッフは単に依頼された仕事をこなすだけではない。話し相手にもなる。高齢者の寂しさを癒す

のに加えて、会話を通じて高齢者の体調の変化も見守る。サービスを提供する側が高齢者を見守るだけではない。スタッフにも高齢者が多く、活動によって救われることもある。布施氏が強調する。「お客さんに何かを与えるだけではなく、お客さんのところで作業しながら会話をする楽しみを得ているんです。それが生きがいになっているのではないのでしょうか」

URは、この団体に拠点を提供する形で側面から支援している。URは今後、実験段階の「みまもりサービス」を踏まえ、建替えで生じた敷地で民間事業者が高齢者福祉施設を建設、運営する事業を進める。

高齢者を地域で見守る街。建替えで生まれ変わるコンフォール松原では、失われた住民のつながりが再構築されようとしている。